

## 第3回 受賞理由

### <金 賞>

部門	企業名	選定理由
投資家部門 (アセットマネージャー)	スビーン・ジャパン	スビーン・ジャパンは、農地・森林・再生可能エネルギーインフラなどに強い特徴から、気候変動のリスク管理や開示の体制を確立し総合的かつ具体的に取り組んでいる点や、学術との連動を図っている点が高く評価された。また、責任投資分野での実績を基盤に、オルタナティブ投資などで積極的に新たな取組を進めており、投資対象の多様性とテーマの多様性の両面で他社より優れ、今後も国内市場において重要な役割を果たすことが期待される。
間接金融部門	三菱UFJ銀行	三菱UFJ銀行は、国内外のトレンドを把握し、これを産業の実態に則したスキームに落とし込むことと、国際的な認知を得るための努力だけでなく、マーケットの創出・整備への貢献を重視する姿勢が顕著であり、例えば、クライメイト・トランジション・ファイナンスの分野でのルールメイキングの活動に関与・牽引している。また、サステナブルビジネス部を独立させて外部から多様な人材を採用する、役員報酬にESGを反映するなど、当社のガバナンス体制も評価された。
資金調達者部門	明治ホールディングス	明治ホールディングスは、2050年に向けた長期環境ビジョンを策定し、具体的なプロジェクトについて詳細に検討・レポートする仕組みを作っている。食品メーカーの経営にしっかりとESGが織り込まれており、業界の中でも先進的に取り組んでいる点や、現場のニーズを精査した現実的な発行額である点で、今後の発展可能性も感じられることが高く評価された。
環境サステナブル企業部門	味の素	事業活動がもたらすアウトカムをポジティブインパクトと回避すべきネガティブインパクトを対置する形で示し、これに向けた価値創造モデルを提示するアプローチは、食品産業の成長戦略の見せ方として秀逸である。これを具体化すべく展開される、強靱で持続可能なフードシステムの構築に向けた数多くのレベルの高い取り組みに加え、トップのリーダーシップの下、実効性あるサステナビリティガバナンス体制が構築されている点は、会社の際立った特徴として高く評価できる。
環境サステナブル企業部門	積水ハウス	ESG経営をグループ全体に浸透させる仕組みが一段と充実し、社会課題解決を事業機会に転換する戦略に厚みが増している。中期的なESG経営指標を執行取締役の報酬に反映し、ESG経営へのコミットメントが明確。対話や表彰を通じた社員のESG経営への参画が進んでいることに加え、バリューチェーン全体での脱炭素化にもKPIを示し取り組んでいる。TCFD開示は、リスク・機会の分析が詳細で具体性があり、課題が明確に示されている点など高く評価される。

## 第3回 受賞理由



### <銀 賞>

部門	企業名	選定理由
投資家部門 (アセットマネージャー)	ニューバーガー・バーマン	ニューバーガー・バーマンは、クライメート・バリュー・アット・リスクをベースとした気候変動リスクの管理投資判断およびエンゲージメントへの活用に加えて、資産クラス全体でのネットゼロ・アライメント目標、ESGプロダクト委員会、独自のESG評価システムなど、具体的な評価や取組について最先端である。また第三者評価機関による格付が少ない日本の中小型株式の評価をインハウスで実施している点や、議決権行使判断の事前表明の取組によって業界に良いインパクトをもたらすことを意識している点が高く評価された。
間接金融部門	静岡銀行	静岡銀行は、インパクト追求による差別化に積極的に取り組んでおり、サステナブルファイナンスの取組が加速している。現状ではインパクトの観点で金賞企業には僅差で及ばないが、地域産業の現状を捉え、脱炭素化の実現に向けた取組の一環として、中堅中小企業向けポジティブインパクトファイナンス（PIF）での実績を重ねている点や、リレーションバンキングとしての強みを活かしている点で、今後のレベルアップも期待できると評価された。
間接金融部門	三井住友信託銀行	三井住友信託銀行は、インパクトファイナンスの多面的な展開、ESG地域金融への貢献、テクノロジーベーストファイナンスチーム【TBF：科学・技術的知見に基づいて、課題の本質や解決策を見出すことおよび技術的価値やリスクを正確に評価することにより、技術の社会実装まで見通した能動的アクションおよびファイナンスを実現する専門家集団】の組成等、他金融機関に先駆けて新たな取組に挑戦する姿勢が顕著であった。TBF機能を活用した地域金融機関への支援も進めており、業界にとどまらず地理的制約を受けずに案件を広げている点が高く評価された。現在進行形で拡大中の取組のため、今後、取組を継続して実績を積み上げていくことが期待される。
資金調達者部門	日本プロロジスリート投資法人	日本プロロジスリート投資法人は、グローバル企業がスポンサーを務めるJ-REITとして積極的にESGファイナンスに取り組んでおり、JREIT初のグリーンエクイティファイナンスを実施して業界を牽引する意欲が感じられた。サステナブル認証を受けており、開示の透明性も高い。Scope3を含む排出量削減に向けた影響評価に課題意識を持っている点も評価された。一方、脱炭素以外の環境面・社会面への配慮に関しては言及がなかったため、銀賞となった。
金融サービス部門 (証券)	三菱UFJモルガン・スタンレー証券	三菱UFJモルガン・スタンレー証券は、全社横断のESG推進体制の中、日本初のトラジションボンドでストラクチャリング・エージェントを務めるなど新たなスキームの取組に優れており、事業価値証券化取引についても、今後の日本のESG関連事業の新たな資金調達市場の開拓として高く評価された。寄付型サステナビリティリンクボンドやトラジションボンドについては、問題点も認識されており、今後課題を見直しながら発展させていくことが期待される。

## 第3回 受賞理由

### <銀 賞>

部門	企業名	選定理由
金融サービス部門 (保険)	損害保険ジャパン	損保ジャパンは、金融向け脱炭素会計パートナーシップ（PCAF）のワーキンググループに早くから加盟し、具体的に保険でのフットプリントの考え方の整理を開始している。他にも、食品ロスに係る費用保険、移動サービス専用自動車保険など、独自性のある取組によるインパクト創出を目指し、事業を通じて貢献できる分野を積極的に発掘しようとする姿勢が高く評価された。今後は保険業界として、グローバルベースでの取り組みの加速に向け牽引を期待したい。
環境サステナブル 企業部門	住友化学	課題解決に向け明確な対応方針を掲げ、体制を整え全社で取り組んでいる。TCFDに率先して賛同するなど、常に先進的な取組が行われ、環境課題解決に向けた問題意識の高さが伺える。課題解決に向けたイノベーションを推進する仕組みづくりにも従前から取り組んでいるほか、カーボンフットプリント評価を進め、業界全体の連携も進めていることが評価される。長期ビジョンの開示、そこからのバックキャストでの目標設定により、環境課題間の連関にも配慮した一歩先行く対応を期待したい。
環境サステナブル 企業部門	セイコーエプソン	直近1年間で、1.5℃シナリオに沿ったGHG排出量削減、2050年までの「カーボンマイナス」と「地下資源消費ゼロ」という野心的な目標へと進化。また、脱炭素や資源循環等に向けての費用投下、2030年までにサプライチェーンにおけるGHG排出量200万t以上削減もうたわれている。環境課題とビジネスの持続性の同期化を図ろうとする姿勢も高く評価したい。今後、これらの野心的な目標達成に向けて、実効性のあるPDCAサイクルの確立と推進、とりわけ、取引先との協働など具体的な取組に注目したい。